



経営の散歩道

一三三回

川中経営所長 川中清司

▼萬慶寺の山門から西を望むとひろびろと田園が開け、はるかかなたに南越の山並みが続き、その中を日野川が流れていた。

伽らんにさえさざるものとしてなく陽光が降りそそぎ、殊に空いて、越知山に夕陽が沈む光景はたとえようもなく美しい。

▼のちに一要和尚がこの寺の第二世を継いだとき、その就任の晋山式に臨んだ承天禪師は次の詩を贈っている。

途を萬慶に取れば暮春の天
草屋常に飾る 宝寿の座
河畔長く 浮ぶ 済渡の船
永平に発起せる 初転法
享浄に分開して 一流の禪
因に此地今小なりと思えど
陽光の主在る限り徳賢なり
深い詩意は訳せないが、今風に言えばこんな内容だろうか。
萬慶寺へと道を進めるとのどかな暮春の空のもと草屋の中に み佛の座が飾られている

日野川の長い河畔に浮ぶ
衆生を救う舟のようだ
永平寺で説き起した佛法が
享浄山 萬慶寺に受つがれ
一流の禪の道が開かれた

まだこの地は 小さいが
陽光和尚がここに在れば
その高い徳と 賢明さで

佛法が 広められていく

▼やがて禪師は隠去して江戸に出て、延亨元年（一七四四）六月十四日にこの世を去った。

永平寺では七月十四日に荼毘式（葬儀）をとり行い、七日間にわたり門前の鳴物などを停止させて喪に服した。

▼時は移り世が変わって幕末の頃、鯖江七代藩主の間部詮（あ



赤穂義士と萬慶寺

その10

き）勝が、中央政界に登場する。天保八年（一八三七）に三才の若さで大阪城代となり、十一年には江戸城西ノ丸の老中となった。しかし老中首座の水野忠邦と意見が合わず解任となる。安政五年（一八五八）、井伊直弼が大老に就くと、詮勝は再び老中・勝手掛兼外国御用掛を命ぜられた。いわば大蔵大臣と外務大臣を兼任するような大役である。

当時、幕府は勅許を待たずして日米通商の神奈川条約を結んだが、無断で調印したことが尊皇攘夷運動を激化させたため、調印に至った経過説明に間部詮勝が朝廷に参内した。

しかし一方では「安政の大獄」が強行され、橋本左内、吉田松陰らが処刑されて、詮勝は井伊大老と意見が合わず幕閣を去る。万延元年（一八六〇）、井伊大老は桜田門外で水戸浪士に襲われて非業の最期をとげる。

文久二年（一八六二）、間部詮勝は隠居謹慎を命ぜられ、剃髪して名を松堂と改め、専ら書画をたのしむ日を送った。

▼百四十五年前、間部詮勝が幕

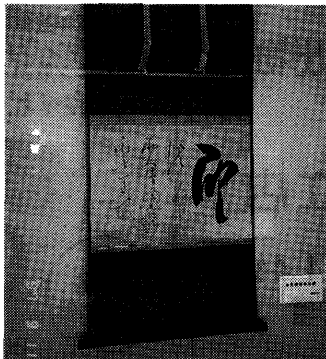
政の中核にありながら、やがて政変にあい越後村上に下ったのと同じ構図をたどり、権力の座にある者の空しさを物語る。

▼平成五年五月十五日、承天禪師の二五〇回忌の大法要が、萬慶寺で厳かに営まれた。

八八才の永平寺貫主の丹羽廉芳禪師が自ら三拜九拜する献茶の式に臨まれた。導師となった第二十二世の久我孝則師（現在、永平寺副監院）が身に纏う緋衣

は、あざやかな真紅の陽光に似て人々の感動をよんだ。

▼赤穂義士と承天禪師、そして間部詮勝。それらの時代を生き抜いた杉の老木がいまも静かにそびえてくましく、萬慶寺の境内に息づいている。



承天禪師の真筆で「即法身」。座禅そのものが悟りの意味を表している。（萬慶寺宝物）

承天禪師は好んでかき餅を食されたという。その頃の作り方を生かして、ポリポリと歯もろくてうまい。赤穂浪士が仇討ちに勝ったのに因んで勝餅と名づけたが、箱の絵の、禪師を仰ぎみる義士たちの眼がキラリと輝いているのが面白い。

— おわり —